



山本晋也氏

▶6月20日  
(東京都)

# 地域活性化という「遊び」

## 『農業経営者』セミナー

講師：山本晋也氏

今回の講師は、本誌の連載「地域活性化という『遊び』」の筆者山本晋也氏である。山本氏は京都で現代美術作家として活動しながら、オーガニックレストランを経営していた。3人目の子供を授かったころ、京都府福知山市の農業生産法人みわ・ダツシユ村の清水三雄氏と出会い、社員として福知山市の限界集落に移住することとなる。移住後は、空き家をリフォームしたり畑で食材をつくったりしながら、自給自足の生活を目指してきた。

昆は、山本氏を講師に招いた趣旨を次のように述べた。

「昨今、田舎暮らしがブームになっているが、実際には難しいというのもよく聞く。移住者が地元の人々と意識の違いがあり、うまく人間関係をつくるできないからだ。かつて共同体を構成する人々は、生きる糧を得る『稼ぎ』とともに他者に報酬を求めない『つとめ(互酬)』の仕事があることを当たり前と感じていた。田舎で暮らすというのは、単に移り住んで自分の都合だけで生きるのではない。山本さんのお話から、この『つとめ』を人々が取り戻すという社会的な意味を汲み取ってもらえると思う」

山本氏にとって、この「つとめ」は楽しい経験だった。山本氏は講演

で、遊びを通じて子供たちと地域の高齢者たちの活力が引き出され、地域活性化へと向かうさまを生き生きとした写真とともに聴衆に語った。以下、山本氏の話を紹介する。

### 理想の子育てのために 移住を選択

京都の市街地から8戸12人の稲葉集落に移住したのは8年前のことである。きっかけは子供が3人に増えたことだが、1人目の子供が生まれてからずっと、世の中を大きく捉えたいうえで、どう行動するべきかを考えなければならぬと思っていた。

結婚前は現代美術に没頭していた。美術大学を卒業後、より広い学びの場を求めてバックパッカーとして世界中を旅した。カリフォルニアでは食べものに感銘を受け、第三世界では自分たちで何でもつくってしまう人々の問題解決能力や、ものがないながらも楽しむ力に驚きを感じた。

子供が生まれると、買ってきた食材で料理をすることに抵抗を感じるようになり、京都市内の畑で食材をつくることから始めた。家族とも、ものごとを簡単に済ませるよりも過程に面白さを見いだす暮らしを送ってきた。たとえば3人目の子供が生まれるときには、産婆さんと呼んで自宅出産を経験したり、家族で北海道

のキャンプ場を巡る生活をしたりと、経験すること自体を楽しんできた。

子供が3人になると、京都の街中で育てるには窮屈に感じるようになった。子供たちをのびのびと育てたいという思いと、農業への興味が高まったことから、田舎への移住を考えるようになった。

そんなとき稲葉集落が空き家への移住者を募集しているのを耳にした。行ってみると、その家は山深い集落のいちばん奥まったところであり、周囲はまさに日本の原風景だった。子育てに理想の場所だと一目惚れし、一家で移住した。

### 村で培われた 子供たちの力

私は子育ての方針として、子供たちには既製品のおもちゃやお菓子は与えない。すると、子供は自分で考えてつくり出すものだ。

いまは田舎でも竹は買ってくる時代だが、稲葉集落の人たちは「竹はあるやろ。山から切ってきたら」という。身近なところから材料を手に入れるという感覚は、私の子供たちにとっても当たり前のことになっていった。

男の子たちは裏山から竹を切ってきてはチャンバラ用の刀をつくったり、弓矢をつくった。インターネッ



移住間もなくのころ。長男と集落のおじいちゃんが談笑しながら祭用のチマキをつくっている。

トなどで調べ、火を起こしてパウムターヘンをつくったり、蕎麦打ちをしたり、魚をさばいて寿司もつくったりしている。集落のおじいちゃんやおばあちゃんには昔のやり方を教わっている。おばあちゃんにはそら豆は皮ごと焼くと美味しいと教わった。長男は、昔の茶畑で摘んだ茶葉で抹茶アイスクリームをつくらうと、乾燥させた葉をどうやって挽くのかとおじいちゃんを訪ね、石臼で挽く方法を教わった。経験を重ねるうちに、遊びのレベルを超える質のおもちや食べものになっていった。

現代の田舎には、ものではなくても情報はあふれる。世界中の新鮮な情報はインターネットで集められる。また昔のことはおじいちゃんやおばあちゃんから聞くことができる。

私の子育ての方針には、もうひとつ、子供たちが何かを楽しそうにしていたら放っておくというのがある。夢中になっているときは、子供の集中力が養われ、想像力が活発に働いているときだからだ。大人の興味で話しかけ、子供の精神活動を途切れさせてはいけない。子供にとっては遊びも仕事も同じだ。家の裏の土手はよく崩れるので、片付けの手伝いをさせるのだが、そのとき子供たちは物語をつくり、登場人物になったつもりで楽しそうに作業する。仕事は辛いもの、我慢してやるものではなく、楽しんでやったほうが効率もよい。

夢中になったり楽しんでやったりしたほうがよいのは、大人にも言えると思う。仕事ができる人は夢中になる度合いが違う。農業の世界でも、なぜそこまでやるのだろうというような人が成功している。子供が真剣にやっていることが遊びであり、成長したときそれが仕事と呼ぶものになるのだろう。

現代は、田舎でも都会と同じようにテレビやゲームで遊ぶ子供たちが多い。稲葉集落のある三和町の子供たちも同じだった。私は地域の子供たちに、もっと外で遊んでほしいと思っていて。移住してから2、3年経つと、外で遊ぶ私の子供たちが、

地域の子供たちの遊び方のお手本になっていった。

## 山本一家が引き出した村の活気

祭や定期的な寄り合い、道路の泥掃除などの共同作業は、月1回のペースである。それらにはすべて参加し、集落の人々の話を「聞く」ことを通して村の一員になっていった。子供たちにも親が話を聞いている姿を見せるようにした。

集落の人々は80歳を過ぎていた。彼らの暮らしは非常に興味深かった。共同作業の間の会話や行動も、まるで映画を見ているようで楽しかった。50〜70年前には靴やカッパを自分たちでつくったとか、家族で木を伐り出してきて家を建てたといった昔話も面白かった。

年一度の祭が来ると、集落のみならず山から笹を取ってきてチマキをつくらうと神様に供える。昔の農業に欠かせない牛が病気になるやう、牛の薬として供えるのだ。民族学の本に書いてあるような、この集落にしかない風習である。おじいちゃんやおばあちゃんにとってその作業は負担だろうが、子供たちが面白がって質問すると楽しそうに話してくれる。

子供たちは普段から、おじいちゃん

んやおばあちゃんの家に遊びに行っている。集落の人からは、村のなかに子供の声がかえるだけで、こんなに雰囲気が変わるものなのかという声があった。

寄り合いは、かつてはみんなで料理をして食べておしゃべりする楽しみのひとつだった。しかし最近では高齢でたいへんなので配達してもらったお弁当を食べていた。地域のイベントは面倒だからと惰性でやるようになると先細りになってしまう。そこで、私たち一家が料理をつくって集会所に持っていき、手品やトラップで遊ぶような寄り合いを開いてみた。すると、以前は夕方6時ごろには終わっていた寄り合いが、夜10時まで盛り上がるようになり、楽しい寄り合いが復活したのだった。

私が好きな芸術家に、ドイツのヨゼフ・ボイスという人がいる。彼は社会彫刻という概念を出した。暮らす人の日々の選択や行動すべてが街や国の風景や雰囲気や彫刻のようにつくり上げているというものだ。つまり集落に住む人は全員が芸術家で、その芸術家たちがつくっている作品が集落。日本人も全員が芸術家だ、日本人がつくった作品が今の日本という社会。それを意識すれば、一人ひとりの行動が変わってくるはずだと思う。(談) (文/平井ゆか)